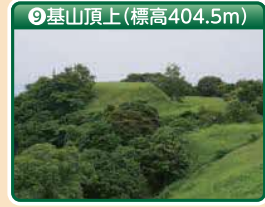


特別史跡 基肄城跡

7世紀中頃に朝鮮半島で行われていた争いの中で、当時の日本は、百濟復興を支援するために唐・新羅軍と戦いましたが、663(天智2)年の白村江の戦いで大敗したことにより撤退しました。そして、次には唐・新羅軍の我が国への侵攻に対する備えが必要となり、朝鮮半島に最も近い北部九州の防衛施設の整備が急がれました。そこで、664(天智3)年に防人や烽(のろし)を置くとともに水城を築き、665(天智4)年に防衛の要であった大宰府の北側に大野城、南側にこの基肄城を築いたのです。



谷部であることから石壁が築かれています。現在は、長さ26m、高さ8.5m、上部の幅3.3mほどが残っています。石壁の一部には水門跡があります。水門跡は、城内の谷水が集まった住吉川(筒川)の水を流すために石壁下部を貫き、長さ9.5m、高さ1.4m、幅1mほどの大きさで、下流へ傾斜するようにつくられています。このほか、最近の調査によって排水機能をもつ3ヶ所の水口も発見されています。また、立地からみて、水門跡付近に、城内への南側の入口として、南門があったことが推定されています。



草スキー場から遊歩道を登りきった場所にある台形状の高台が基山の頂上です。この高台は、中世の南北朝時代から戦国時代頃にかけて基山が山城として使用された際に、いものがんぎとともに築かれたと思われる主郭で、周囲の裾裾が覆っています。この場所は一等三角点のある眺望の良い場所です。博多湾・筑紫平野・阿蘇山・雲仙岳まで見わたすことができます。また、この南端にある巨石は「タマタマ石」と呼ばれ、伝承では基山南麓にある荒穂神社(式内社)が当地にあった頃の産座(神様の宿る岩)とされています。



水門跡・南門跡の東側の谷部(仏谷)に築かれており、長さ15m、高さ5mほどの石壁が谷部を塞ぐようにつくられています。この中央付近に門のような空間が見られます。現在のところ遺構の詳細は不明です。

この地点には古くから「カネツキ」という地名が残されており、伝承では寺院の鐘撞施設があったといわれています。また、ここは城内が一望できる場所にあることから、情報伝達の施設があったとも推測されています。

基山の東峰の最頂部にある遺構で、直径約18mの窪地がつけられています。この形状より貯水池跡か烽火跡と推測されています。同様な痕跡は、西峰(基山頂上付近の尾根部)にも見られます。



城の東北部に連なる土塁(幅6m、高さ3m)を幅2.7mほど切り割ってつくられた門です。門の基礎部分には、左右両端に門柱(礎石)が残っています。近世には、水門跡(南門跡)側からこの門跡を通過して萩原(筑紫野:現筑紫野市)へ向かう近道として利用されており、「萩原越え」と呼ばれていました。

北帝門(北御門)跡は城の北部にあり、太宰府政庁方面から土塁(門柱の基礎石)が残っています。土塁を幅4mほど切り通した空間があり、石壁が残っています。門は最も奥の中央部に築かれています。また、門の内側にも土塁の切れ目があって、二重に門が置かれていた可能性もあります。

大礎石群は、花崗岩を柱の基礎とした礎石建物跡で、柱間が1間×3間あります。城内ではこの建物だけが特に大きく、城内を一望できる場所に建てられていることから、何か特別な性格の建物であったことが推測されます。城内にはほかに倉庫などに利用されたと思われる建物跡が約40棟残っていますが、一部を除きほとんどの建物は柱間が5間×3間の大きさのものです。この建物の大きさは、同時期に建てられた大野城跡の建物と共通しています。



いものがんぎは、中世頃に山城として再び使用された際、基山頂上の土塁の一部を再び切り割ってつくられた堀切です。形状が宇治の堀に似ていることから「いものがんぎ」と呼ばれています。この遺構の南側にある台形状の主郭へ、敵が侵入するのを防ぐためのものです。

土塁は、いくつかの谷部の石壁(石垣)と一体となって山城全体を囲み、敵の侵入を防ぐための城壁を形成しています。土塁は、この城の外側斜面の急峻な地形をさらに強化したもので、外側斜面の上部付近を地形に沿って連なっています。

おすすめ散策路(太線) ●●●●●
分岐点 ●
 基肄城内の主要遺構を巡ることができるコースです。
 ①水門跡・南門跡→米倉礎石群→3鐘撞跡
 →4つつみ跡→5東北門跡→丸尾礎石群
 →7大礎石群→9基山頂上
 所要時間:約二時間(個人によって異なります)

基山町の観光情報はこちら!
 きままにきやま
 kimama ni kiyama
<https://kimama-ni-kiyama.com/>

English 日本語 繁体中文 简体中文

管理者:基山町